

2025年 大使新年挨拶

明けましておめでとうございます。

皆様はお正月をどうお過ごしだったでしょうか。各国の駐バチカン大使にとり、今回の年末年始は例年以上に忙しい年越しとなりました。

まず、12月24日には、教皇フランシスコ台下によるサン・ピエトロ大聖堂の「聖なる扉」開門式典と、それに続けてクリスマスのミサがありました。

元旦は新年の世界平和の日を祝うミサで始まり、パロリン國務長官を招いての大使級晩餐会、続けて、9日には、教皇による恒例の外交団新年謁見と、日程がひしめいていました。

今年2025年、バチカンは25年に一度の「聖年」を迎えました。725年前に遡る行事です。当時の教皇ボニファティウス8世が定めたもので、ローマの四大教会に巡礼し、この年に特別に開かれた「聖門」をくぐることで罰の赦しが得られるというものです。

前述のサン・ピエトロ大聖堂に続き、12月29日には、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂、元旦にサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂、そして1月5日にサン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ大聖堂の聖なる扉が開かれ、4大聖堂全ての門が開放されました。この聖門をくぐるため、この1年間の間に、3千万人以上の巡礼者が、世界中からバチカンを訪れると推定されています。

2025年はまた、日本にとり大阪・関西万博の年でもあります。バチカンはイタリア館の一角に参加、バチカン美術館よりカラバッジョ作の「キリストの埋葬」が出展される予定です。日本の内外より、一人でも多くの方が、大阪・関西万博を訪れ、バチカンの展示をご覧いただくことを願っております。

さて、2025年は、万博以外でも日本バチカン関係において重要な記念の年となります。

巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの発案により、九州からキリシタン大名らの名代として派遣された天正遣欧少年使節団が教皇グレゴリウス13世に謁見を果たしたのは、1585年3月23日のことでした。本年はその記念すべき謁見から440周年を迎えます。そして、仙台藩主伊達政宗に派遣された支倉常長らからなる慶長遣欧使節団が教皇パウルス5世に謁見したのはその30年後、1615年11月3日で、今年が410周年となります。

その後、日本におけるキリスト教は鎖国と禁教により長らく沈黙を続けていましたが、1858年に長崎が開港され、その外国人居留区の中に大浦天主堂が建てられると、献堂からおよそ1カ月後、そこに十数名の日本人が現れ、主任司祭のプチジャン神父に、自分たちの心は神父と同じものであると告げ、聖母マリア像の場所を尋ねたのです。1865年3月17日のこの出来事は、プチジャン神父から本国のフランスやバチカンに伝えられ、迫害を免れ、極秘のもとに二世紀半にわたり、信仰を守ったいわゆる「潜伏キリシタン」たちの存在が明らかになったのでした。この驚くべき「信徒発見」から、今年には160周年にあたります。

また、実は天正遣欧少年使節団より遡ること30年前に「薩摩のベルナルド」と呼ばれる日本人が教皇に謁見したことが記録に残っています。フランシスコ・ザビエルから直接洗礼を受け、ザビエルの教えに心酔した青年は、1551年に日本を出国し、インドのゴアを経てポルトガルのリスボンに到着します。ポルトガルのコインブラで修練生活を送ったのち、スペインを経てローマに到着したのが、1555年1月。1年近くローマに滞在する間に、教皇パウロ4世に謁見する機会を得たそうです。歴史上初めて、日本人が教皇に謁見してから、今年には470周年を迎えます。

聖年や万博、またさまざまな周年の重なるこの記念すべき年に、日本とバチカンの友好関係がますます強固なものとなるよう、邁進する所存です。

皆様のさらなるお力添えをいただければ幸いです。

どうぞ宜しくお願い致します。

令和7年1月13日 駐バチカン日本国特命全権大使 千葉 明